
yes!プリキュア5MaxHeart

刹那・F・セイエイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

yes!プリキュア5MaxHeart

【Nコード】

N8764T

【作者名】

刹那・F・セイエイ

【あらすじ】

ドックゾーンとの戦いを終え、安息の時を手に入れたなぎさたち。しかし、突如現れた光により、異世界へと飛ばされる。

#00 異邦者たち

気がつくと、三人の少女は小高い丘の上で仲良く眠っていた。

「ん……ここは……」

最初に目を覚ましたのは、明るい茶髪をショートカットにした少女、美墨なぎさであった。

「にしても、ここはいったいどこなの？」

辺りを見回してみるも、目に飛び込んでくるのは、見知らぬ景色ばかり。そして、おもむろに自分の服装を見てみると、自分がこれまでうんざりするほど袖を通してきたベローネ学院の制服ではなく、いつの間にか見慣れない服 たぶんどこかの学校の制服 に身を包んでいた。

「なぎさ、ここはいったいどこなの？」

「それ、あたしが一番知りたいんだけど……」

ほのかに続き、ひかりが目を覚ます。

「なぎささん、ここはいったい……」

「ストップ、これ以上聞くの禁止」

ひかりにも同じことを聞かれそうになったため、半ば遮るようにして中断させる。

「見たことのない制服ね……」

「お世辞にもカッコいいとは言えませんね……」

ほのかが率直な感想を示し、ひかりがやや辛口なコメントをつぶやく。なぎさはふと、スカートのポケットに異物を感じ、ポケットの中をまさぐってみると、小さな手帳がポケットから出てきた。

「手帳？」

「そつみたいね」

なぎさはおもむろに手帳を開く。開かれた手帳にはこう書いてあった、『サンクルミエール学園中等部3年A組美墨なぎさ』と。

「サンクルミエール学園？」

「聞いたことのない学校ね……」
「とにかく、ここがどこかを調べる必要がありますね」
ひかりの提案により、現在位置を調べることが決定した。しかし、彼女たちは知らない。今いる場所が、『自分たちの世界』ではないことに。

次回予告

現在位置を調査するため、市街地へと繰り出す三人しかし、そこにあったのは、見慣れない風景だった
次回、『見知らぬ世界』
ここはいつたい、どこなのか……

#01 見知らぬ世界

小高い丘を降りて市街地に出た三人が早速とつた行動は、情報収集でもなく、現状把握でもなく、着替えることだった。今来ている服がサンクルミエール学園と言う学校の制服であろう以上、この格好のままうるついで、保安局に補導されたのではたまったものではない。

三人それぞれが着替えを済ませ、現状把握を開始する。途中なぎさが横道にそれそうになるのをほのかとひかりが必死になって静止しながらも、ある程度の情報を手に入れることに成功した。

「なぎさ、今までに入手した情報を整理すると、ここは私達の知る世界ではないということがわかった」

「それに、この制服を見て誰も違和感を感じないってところからして、ベローネ学院は存在しないってことになる」

「なんか、ちょっとさみしいですね……」

ちなみに、三人が今着ているのは、ベローネ学院の制服であるが、そのことについて誰も言及するものはいなかった。おそらく、なぎさの考察どおり本当にベローネ学院が存在しないか、ベローネ学院を知らないか　もつとも、後者は考えにくい　のどちらかだろう。

「ほのか、ひかり、もつと大きな問題があるんだけど……」

『大事な問題』と言われ、ほのかとひかりのふたりは首をかしげる。

「元の世界に帰る方法が見つかるまでの仮住まいをどうするかってこと」

「それもそうね……」

「でも、一介の中学生に部屋を貸すような不動産屋なんてどこにもありませんよ」

ひかりの指摘どおり、こんな一介の中学生たちに部屋を貸す不動産屋など、どこの世界に行ってもお目にかかれないだろう。

「鞆に入っていた転入届の日付は明日になってるから、観光がてら、散策してみましよう」

「そうね、ついでに言っと、今夜の寝床も探さないかね」

ほのかの提案により、観光がてら散策することになった三人。そこで彼女たちは、五人の戦士に遭遇することになる。

次回予告

観光がてら散策していた三人の前に、突如現れた謎の勢力しかし、そんな彼女たちの前に、五人の戦士が現れる

次回、『華麗に羽ばたく五つのココロ』

光の戦士、現る

#02 華麗に羽ばたく五つの「コロ

市内を散策して、今日の宿はすぐに見つかった。しかし、あまりにも早く今日の宿が見つかったため、今度こそ本当に市内散策をすることになった。

「なかなか洒落た街ね」

「ヨーロッパ風の風景だから、そう感じるのね」

「単純に歩いているだけで、楽しい気分になってきますね」

三人が市内を散策してしばらくすると、一軒の和菓子屋を発見した。一見ただけで老舗とわかるため、やや入りづらく感じる。

「なんか、高そうな店ね」

「いかにも老舗って感じね」

「けど、老舗だからといって、味がいいとは限らないですよ」

ひかりの相変わらずな辛口コメントに、なぎさとほのかのふたりは苦笑するしかなかった。

「あはは……」

「と、とにかく、中に入ってみましょう」

なぎさとひかりのふたりは、ほのかに促されるままに、その老舗の和菓子屋ののれんをくぐった。

のれんをくぐったその先には、緑色の髪をした少女が、退屈そうな表情をしてカウンターにいた。おそらく、客が来ずに暇をもて余していたのだろう。

そんなに暇ならば、客として何か買おう。別に冷やかしてきたわけではない。

なぎさは店内をざっと一瞥して、10個入の豆大福を三つ手に取る。

「これ、下さい」

その後三人は近くの公園で、先程購入した豆大福を仲良く食べていた。

「なかなかの味ね」

「この値段でまずかつたら苦情が来るレベルね」

「老舗の名は伊達じゃないってわけですか」

「見つけましたよ、プリキュア」

『プリキュア』と言われ、三人はとっさに身構える。まさか、このソフト帽を被ったスーツの男、クイーンのいのであるひかりを狙つて!?

しかし、男が発した言葉は、全く違うことであった。

「さあ、渡してもらいますよ、ドリームコレット」

ドリームコレット、全く聞き覚えのない単語に、三人は困惑する。

そもそも、光の園においてクイーンのいのち以外に奪う価値のあるものといえば、全てを産み出す力をもたらすプリズムホーピッシュくらいだろう。

「アンタ、私達を誰かと勘違いしてない？」

「ドリームコレットなんて、聞いたこともないわ」

「あなたの言うプリキュアって、もしかしてあの人たちじゃないですか？」

ひかりの指した方向には、プリキュアと思われる五人の少女がいた。

次回予告

突然なぎさたちの前に現れた五人の少女

彼女達の登場は、何をもたらすのか

次回、『パルミエ王国の戦士たち』

現れたのは、五人のプリキュア

#03 パルミエ王国の戦士たち

突然現れた五人のプリキュアたちが、スーツの男の召還した黒い怪人 確かコワイナーとか言っていた との戦闘を終え、変身を解除してこちらに向かってきた。

「あなた達、怪我はない？」

駆け寄ってきた五人のプリキュアのうち、こちら側から見て右端にいた青いプリキュアがこちらの安否を尋ねてくる。

「大丈夫よ、私達は」

「それより、あなた方はいったい誰なんです？」

目の前の五人に対し、ひかりが警戒心 と言うより敵意 むき出しで対応する。

「落ち着いて、私達は敵じゃない!!」

ひかりの敵意を鋭敏に感じ取ったのか、真ん中にいた おそらくリーダーと思われる ピンクのプリキュアが必死にひかりをなだめようとする。

「ひかり、そんな敵意むき出しじゃ、分かりあいたくても分かりあえないわよ」

「そうよ、だから落ち着いて」

「……」

なぎさとほのかに言われて納得したのか、ひかりが警戒のレベルを少し下げた。

「よかった……わかってくれたんだ……」

自分たちへの警戒が少し薄れたのを感じ取ったのか、ピンクのプリキュアが胸を撫で下ろす。そして、青いプリキュアが何かを質問しようとして、しかしそれは突然現れた謎の生き物によって遮られた。

「みんな、大丈夫ココ？」

「……何か喋った!!」

「何かとは失礼ココ!!」

「ココ、黙ってて」

突然現れた謎の生き物の怒りを、青いプリキュアが一言で封殺する。そして、青いプリキュアが一番聞きたかったであろう質問を口にする。

「見かけない制服だけど、あなたたちどこから来たの？」

やはりそうきたか……しかし、質問されたからには、答えないわけにはいかない。なぎさはひとつ息をつくとき、胸ポケットからかつてベローネ学院の母校の生徒手帳を取り出した。

「ここよ」

「ベローネ学院？」

「聞いたことのない学校ですね……」

『ベローネ学院』と聞いて、五人は首をかしげる。無理もないだろう、彼女たちにとって、ベローネ学院は『異世界の学校』なのだから。

すると、青いプリキュアは判断を保留したのか、もしくは考えることを放棄したのかは不明だが、おそらくは後者、手にしていた生徒手帳をなぎさに渡す。

「あなたたち、これからどうするの？」

「そうね……今日の宿は見つかったし……」

「あとは、サンクルミエール学園新しい学校の位置ね」

「なぎささん、ほのかさん、ついでだから案内してもらいましょう」
ひかりの提案により、明日から通うことになる学校に案内してもらうことになった三人。五人のプリキュアたちに促されるままに、彼女たちはついていった。

次回予告

これから母校となる学校へと案内される三人

しかし、そこにあっただのは彼女たちの予想を大きく上回るものだった

次回、『転校生』

新たなる学園生活が、はじまる

#04 転校生

突然現れた五人のプリキュアたちに案内され、新しい学校に着いた三人。

「す、凄い……」

「すごく……大きいです……」

「……」

見ると、先程からひかりがずっと黙ったままだつたので、なぎさが「ひかり？」を声をかけようとすると、ひかりが突然顔を上げて大声で叫ぶ。

「ありえなあああい!!」

それ私のセリフ!!と言いたくなる衝動を懸命に抑え込み、なぎさは小さくつぶやく。

「確かに……ありえないわね……」

「たぶん、ベローネの三倍の敷地面積じゃないかしら……」

ひかりのいうとおり、この広さはありえない。いったい何をどう間違えたらこんなでかい学校が建つのか、なぎさは本気で気になってしまった。

「場所はわかってくれたかしら？」

「ええ、わかったわ」

青いプリキュアが新しい学校の位置は覚えられたかと聞いてきたため、なぎさは短く返答する。そして、新しい教室を確認したのち、八人はそこで解散となった。

三人は今日泊まるホテルにチェックインし、明日から通う学校の支度をそれぞれはじめた。

「教科書は……」

「全部持っていきましよう」

「どの授業があるかなんて、わかりませんからね」

三人は、とりあえずといった感じで鞆に教科書を次々に詰め込んで

いく。端から見れば、かなりシユールな光景に見えただろう。

そして、鞆に教科書をすべて詰め込んだ三人は、とくに何もすることがなく、早々に眠りについた。

そして次の日、転校初日。なぎさはいつも通りに上着のボタンを全開にして行こうとしたところ、ほのかから「最初くらい、しっかりしなさい」と母親じみたことを言われ、なぎさはそれに渋々従った。簡単な自己紹介を済ませ、休み時間になると、転校生なら誰もが経験する質問タイムが始まった。

「ねえ、どこから来たの？」

「なんでここへ転校して来たの？」

質問の内容までテンプレ通りだと、もはや笑いたくなる。しかし適当に、というわけにもいかず、なぎさは当たり前障りのない答えを返し、早々に夢の中へと旅立っていった。

なぎさとほのかのふたりと別れ、ひとり教室にいるひかりは、やや退屈げに教室内を見回していた。

以前はやや消極的でも、自然と人が集まり友達ができていったが、ここではそうはいかないかもしれない。ここが勝手の違う新天地である以上、積極的に友達を作っていけないといけない。

しかし、いきなり話しかけて『友達になって』というのも変に思われるだろう。だが、声をかけなければいつまでたっても友達なんかできやしない。

まずは声をかけやすそうな人を探そう。声をかけやすそうな人、声をかけやすそうな人……

いた、あの金髪のツインテールの少女にしよう。確か名前は……うらら、そう、春日野うらら。彼女なら、声をかけやすそうだし、何より、友達になれるかもしれない。

だが、声をかけるタイミングを間違えてはダメだ。いつ声をかけようか……

昼休みなら、声をかけやすいかもしれない。そう思ったひかりは、

昼休みを待つことにした。

以前の世界で中学一年生の授業はすべてこなしているため、ひかりにとつては非常に退屈な四時間が過ぎ、昼休みになったことを確認したひかりは、昼休みになってもひとり教室にぼつんといるうららに声をかける。

「あの……春日野……さん？」

「はい……私に何か？」

「もし、よろしければ……ご一緒しませんか？」

無論、『何を』とは聞くまい。この時間に誘ったのだ、よほどのバ力でもない限り昼食に誘われたとわかるだろう。

目の前の少女、春日野うららは時間にして数秒ほど考えたあと、「いいですよ」と承諾する。

「そうだ、もし良かったら、私のセンパイたちをそのときに紹介してもいいですか？」

センパイたち……恐らくはあの四人だろう。そして、昨日一日の彼女たちのやり取りを聞く限り、二つ輪と外はねのプリキュアが二年生、柳と流水のプリキュアが　なぎさとほのかの同級生である

三年生だろう。

ひかりはややうつむいて思案するフリをしたあと、当初の答えを告げる。

「いいですよ」

目の前の猫耳のプリキュアに連れられ、どう考えても金の使い方間違えたとは思えないオープンテラスに案内される。ふと気がつく、なぎさとほのかのふたりがいつの間にか席についていた。

「ひかり、遅いわよ」

「待ってたんだから」

「すみません……」

なぎさとほのかの嘆息めいたつぶやきに、ひかりはやや苦笑ぎみに謝る。そして、それぞれが思い思いのもの　自分はラーメンをたのみ、昼食を食べ始めた。

次回予告

ナッツハウスへと案内される途中、ナイトメアの襲撃を受ける八人マックスハート組の三人は、ナイトメアとプリキュア5の弱さに唾然とする

次回、『弱すぎる敵とプリキュア5』

こんなプリキュアたちで、本当に大丈夫なのか……

#04 転校生（後書き）

次回は本編再構成シリーズの更新予定

#05 弱すぎる敵とプリキュア5

「ナッツハウス？」

「はい、私たちの活動拠点なんです」

すべての授業が終わり、放課後になって暇を持て余していると、緑色の髪をした図書委員、秋元こまちにナッツハウスなるアクセサリショップへと招待されることになった。つまり、私たちでいうTAKO cafeみたいなものか……と考えていると、いつの間にか隣にいたほのかが「行ってみよう」とでも言いたげな表情でこちらを見ている。

まあ、いいか……部活検索なら明日でもできるし……そう思ったなぎさは、こまちの誘いに乗ることにした。

五人固まって歩くこまち達を視界に捉えつつ、なぎさはほのかとひかりを両隣につれてやや離れた位置を歩いていると、左隣にいたひかりがやや怪訝そうな表情を浮かべていることになぎさは気づき、なぎさはひかりを見やる。

「この近くに、強烈な悪意を感じます。おそらくは『ナイトメア』という組織でしょう」

「ほのか、どうする？」

「今は様子見ね、あの五人で退けられるようなら私たちが変身する必要性は皆無なわけだし」

なぎさはほのかのその言葉に短くうなずき、今まさに叩き起こそうとしていた相棒メンバーを通学靴にしまった。

そして、五人のプリキュアと敵勢力の戦闘が始まったのだが、なぎさ達はその戦闘を見て啞然とする。アンタ達、あんな弱そうな怪人一体に何手こずってんの……

しかし、そこは伝説の戦士プリキュア。手こずっているのは単なるポーズに過ぎず、敵の体力を削っているだけかと思いきや、あの五人が本気で手こずっているとわかったため、なぎさは思わず後輩の

弱さについて泣けてしまう。

「なぎささん、あの五人一発殴ってきていいですか？見ててムカついてきました」

「同感、私もあの五人殴りたい気分なの」

ふと気づくと、両隣のふたりが苛立ちをあらわにした表情を浮かべて五人のプリキュアを睨み付けている。正直言って、私もあの五人を殴りたい気分だ。

「じゃあ、あの仮面つけた怪人ボコって鬱憤晴らす？」

「勿論」

「何をわかりきったことを」

やはり、このふたりは予想通りの返答をしてきた。さて、変身して軽く遊んで、格の違いってやつを見せ付けてやりますか……

そう思ったなぎさは、サクッとプリキュアに変身して、仮面をつけた怪人を蹂躪する。そして、五人のプリキュアがあればほど苦戦していた怪人が、マックスハート組の三人の前には一分ともたずに倒された。

「ここがナッツハウス……」

「そう、私たちの活動拠点」

ずいぶん広い活動拠点だな……となぎさが思っていると、ほのかとひかりがやや苦笑気味になぎさを見つめている。

そして、こまちの案内により、三人はナッツハウスの中へと入っていった。

次回予告

ナイトメアを撃退し、ナッツハウスで談笑する八人

先の戦闘で苛立っていたひかりが、プリキュア5に特訓を提案する

次回、『チームワークと連撃』

プリキュア5に足りないもの、それは……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8764t/>

yes!プリキュア5MaxHeart

2011年11月16日16時11分発行